

統合医療を支援するためのデザインとシステムの研究

松 永 行 利*¹

福 岡 崇*²

[要 旨]

近年、わが国の医療現場において、予防医学や補完・代替医療を含む統合医療への関心が高まっている。そこで、統合医療の考えを取り入れた施設の調査及び、関連する企業への統合医療への関心についてヒアリングを実施し、統合医療に関わる産業について考察した。

1 はじめに

わが国の医療現場において、統合医療への関心が急速に高まってきている背景には、発現した症状に対する処方、施術といった従来の医療の限界に対する打開策としての期待と同時に、個人に合わせた医療プログラムの作成や、これまで医療の範囲外であった健康増進のためのサービスとの組み合わせの提供、といった顧客意識の高まりが考えられる。

これら統合医療を具体的に実践する場合、受検する個人の身体や精神状態などの要素も大きく、器具や手法のみならず、そのフィールドについても「癒しの空間」としてデザイン手法が必要と考えられる。

平成19年度は、これらの動向について、京都府地域においてどのように展開されているかの実態事例と、企業活動としてどのように取り込もうとしているかをヒアリング調査したので報告する。

2 調査

2.1 施設事例調査

2.1.1 施設事例の概要

統合医療を実施している事例として、京都市南区にあるメディカルフィットネスクラブ「SHIN-SHIN」(以下「SHIN-SHIN」)について調査した。

統合医療に力を入れている同仁会グループである「SHIN-SHIN」は、同仁会クリニックと併設され、タイアップによる医療チェックをベースに、生活習慣病の方を含めて個人の健康状態に合わせたトレーニングによってメディカルフィットネスを実施している。

SHIN-SHINは、指定運動診療施設の指定を受けて運営している。会員は700名弱で、健康な人、生活習慣病予備軍の人、生活習慣病で医師の処方として来館している人に分類される。生活習慣病の人は全体の3割弱で、高脂血症、高血圧、糖尿病が大部分である。これらの症状は、医師の処方によるメディカルフィットネスのプログラムによって体脂肪、中性脂肪、HDLコレステロールの改善に効果がみられる。

2.1.2 室内デザイン等の特徴

フィットネスの室内については、スポーツ施設のイメージよりも、癒しの空間としてのホスピタ

* 1 産学公連携推進室 主任研究員

* 2 産学公連携推進室 主任



フィットネスメインフロアは、会員の需要に応じてやや手狭な感じ



各フロアへのアプローチは、間接照明を用いて、快活なイメージより癒しのイメージを演出

リティを重視したデザインである。

デザインの方向性の決定に当たってはシティホテルを数箇所見学の上、グランドハイアット東京のフィットネス「なごみ」をイメージしたデザインを採用したとのことである。

この空間についてデザイン等の分析手法でよく用いられるカラーイメージスケールは図1のとおりである。

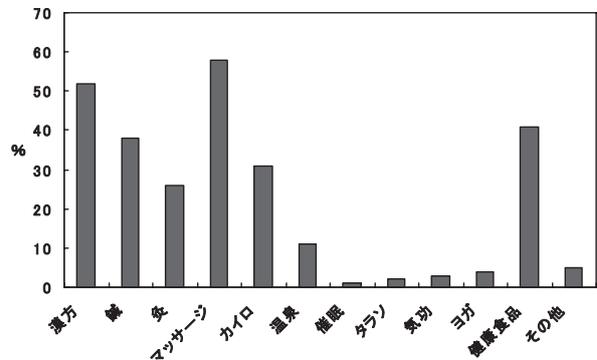
2.2 一般の人の意識調査(京都府立医科大学調べ)

現時点で、一般の市民がどの程度、補完・代替医療を利用しているかについては、京都府立医科大学が1999年秋に実施した自己記入式アンケート(留置法)により京都市下京区町内会在住の一般市

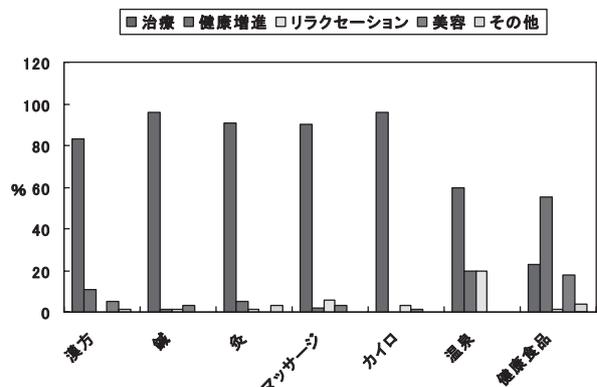
民(20歳以上)472名に調査したものを参考にしたい。

※ 留置法—調査員が調査票をもって対象者を面接して調査の目的を説明し、調査票へ記入を依頼する。その場ですぐに調査票を回収するのではなく、後日来訪問して記入済みの調査票を回収するという手法。回答に時間が必要な場合や、人前で回答しにくい場合などに有効である。

472名中290名が、治療目的を中心に補完・代替医療を利用している。(下図実施している補完・代替医療の種類、目的参照)また、利用者の特徴としては年齢、収入、学歴等による差異は見られないが、男女別については、補完・代替医療の種類を問わず、どの種類でも女性の利用率が高く、全体では約10ポイント高い傾向が確認できる。



実施している補完・代替医療の種類



実施している補完・代替医療の目的

2.3 メーカーの聴き取り調査

2.3.1 医療関連メーカーの聴き取り調査

京都府内に本社を置く医療・理化学機器メーカーについてのヒアリングを行った。このメーカーは、従業員9000名、資本金260億円程度の大企業である。ヒアリングに対応してもらったのはデザイン室である。

病院用医療機器のデザインにおいては、医師等の専門家が扱うものが多く、専門家のユーザビリティを中心に設計・デザインがなされてきた経緯がある。しかしながら、医療現場においても顧客意識が高まりつつある中で、患者（顧客）にとってよりよい医療機器を提供する必要が出てきた。その気運に呼応して、この医療機器メーカーでは、もう一歩進んで専門家である医師に対し、顧客意識についてのコンサルティングまで行い、機器導入に持っていくことを検討している。比較的少量多品種生産である医療機器分野においても他社との競合があるため、機器の性能だけでは優位性が打ち出せない場合、コンサルティングできる能力や開発の時点から医療現場における顧客ニーズがわかる人材を持つことの意義は大きい。統合医療の考え方は、これからの医療関連機器のデザイン開発においても意識しなければならない領域と捉えられている。

2.3.2 家庭用電気機械器具メーカーの聴き取り調査

大阪府内に本社を置く家庭用電気機械器具メーカーについてヒアリングを行った。このメーカーは、従業員23000名、資本金2000億円程度の大企業である。ヒアリングに対応してもらったのはデザインセンターである。

ヒアリングによると、家庭用電気機械器具については、実際に顧客が入手するには、量販店、電

気専門店、ネット通販等を経由しなければならない。一般的に技術開発、製品開発の倍くらいの経費を投じて、顧客にその商品のすばらしさを伝える（広報、宣伝）手段を講じている。そのため、購入の動機となるようなわかりやすいメリットを一般ユーザーに訴求する必要がある。

そのため、健康についての意識の高まりは認めながらも、メーカーが個人の生活習慣に対して介入することについて一般ユーザーに訴求できない限り、新商品開発のテーマとはなりにくい。

3 調査結果

3.1 施設事例調査の結果

3.1.1 施設事例調査の結果

通常のフィットネスクラブともっとも異なる点は、顧客層である。メディカルフィットネスにすることによって、通常のフィットネスよりも固定化が強まる傾向がある。経営的な観点からいえば、強力な顧客囲い込みの材料となる。その反面、会員の利用率が高まることによって当初の見込みよりも常に混雑した状況となる。

また、医師の診断、処方が必要であり、通常のフィットネスと比較して地域密着度も高くなっている傾向である。

3.1.2 室内デザイン調査の結果

「SHIN-SHIN」においては、癒しの空間としてのホスピタリティを演出するため、図1におけるシック領域の色調を採用している。この領域の特長は、高級感の演出がしやすく、クラシックやダンディといった領域に比較して幾分明るく軟らかめの色調であることである。

メディカルフィットネスの場合、3.1.1の結果のように地域密着度が高く、ユーザー像が多様となり特定の顧客設定は困難であることから、高級

イメージを維持しながらもコストパフォーマンスを重要視した室内デザインの設定が必要となる。最近では「癒し」を強調した補完・代替医療（マッサージ等）は、植木等を活用したナチュラルのイメージでインテリアを統一しているところも見かけられる。ただし、本年度は、具体的に1例しか調査できていない。今後さらに調査が必要である。

3.2 一般の人の意識調査の結果

2.2において、補完・代替医療が、年齢、収入、学歴等に関係なく広く利用されていることが示された。しかしながら、活用の動機について見ると、具体的症状に対しての対応である場合が多く、リラクゼーションのように余裕を持って補完・代替医療を施術することは少ない。したがって、需要としてはかなりあるが、一般ユーザーにおける統合医療についての意識の高まりがこれによっ

て証明されることにはならない。今後、補完・代替医療を利用している現場及び利用者の空間デザインに関する意識調査が必要である。

3.3 メーカーの聴き取り調査の結果

3.3.1 医療関連メーカーの聴き取り調査の結果

統合医療に対する認識はないが、医療機器販売等を通じ医療現場の意識の変化については敏感である。機器についてのデザインは、かなり高いレベルまでできており、顧客を意識したオーダーメイド医療に対応した製品デザインについてのメーカーの姿勢も意欲的である。機器の販売台数も量産型であるが民生品と比較して少なく、単価も高いので、オプション設定でかなりカスタマイズできる可能性もあることが要因であると考えられる。

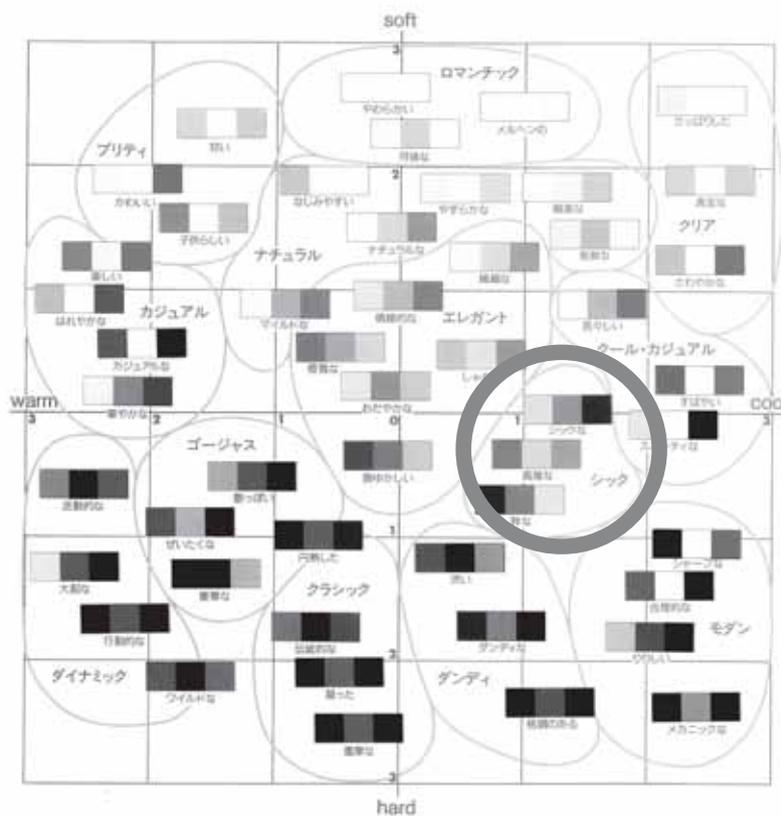


図1 カラーイメージスケールのイメージマップ

3.3.2 家庭用電気機械器具メーカー聴き取り 調査の結果

規模が大きい家庭用電気機械器具メーカーでは、厳しい国際競争にさらされており、漠然とした新市場には取り組みにくい。健康についての意識の高まりはあるが、それを統合医療と結び付けて商品化あるいは商品コンセプトに持っていくには企業規模が大きすぎる。トップダウンで商品化まで持っていけるような小回りのきく企業に現時点ではビジネスチャンスはあると考えられる。

4 まとめ及び今後の展望

顧客意識が高まるにつれて、その個人にあった医療を望む傾向が強まることが予想される。その流れの中で医療サービスの選択の幅が広がり、今後ますます医療とリラクゼーションの領域の融合化が図られると考えられ、統合医療が取り組まれる空間だけでなく、支援機器開発、リラクゼーション商品開発の可能性もある。

今後の展望としては、さらに調査を進め、統合医療視点からのライフスタイルを提案するためのコンセプト及びイメージづくりを進める必要がある。